# 幼童教訓 伊呂波訣繪抄

9
3871

早稲田大學圖書館
25 9 26
購 赤

早稲田大學圖書館
古典籍
3871

# 兒童教訓 伊呂波歌の序

往古之紙

母をそろくのふみの和語女もじを数の故ふ
父紙のぞといひ母を伊呂といふ伊呂と
字母乃謂なり其むり護命空海の
作と云へる歌ぬ詞ふりて今にも

ふ児童の伊呂波とてはみ唱へ耳ふさ
てさゝ〳〵やをよろづ本ら〳〵四十七字を頴
とうて各三首ぞ〳〵のさま〴〵歌をはぐゝ
或人神ふ〳〵来うて撰みちりだめん
事公求む誠よ瑞穂の国ゆふ常也
乃浪静みて野ゝ〳〵腰を敲〳〵

神恩ゐ馴ゝ徒よ日公送る葦の風俗
をゑめを一助ともありのり其言葉
の実曲をるいてそで此歌乃意公あま
なひさゝばゝをる人のお意ゐめやも

神都書林　講古堂主書

いのる
ねがい
ごとは
うらぬ
神ぐら
こそ

神も
あの
ごと
うけ
たま
へん

いつぱしに通るまぢきいぢ
いはーあの人乃ぐでこそ

ひまなれ共そもごを
ねて胸でおろされそーかあろうー

直ふせど
のつく
冠そのまも
李乃下に
仏をゝきて

種を押ばかりの溝へ私いるよう
溜ぞるいようゝね事と却りてどう
も書学び男いゆえとぐゝろは

春立てふとをのとけきものよかな

元日やまづ
年礼を
うか



恥うと思ふ仏のつきめるいん種ゆ入ろこそゝめとやせん
演萩の筆ふつきても志のぐろゝ今にて書する小冊の乃用

翁乃
杖ふもとおし
立どして
日暮乃を
つそぐ
梅
さ

西とのひ茶ふのそぶ其人とこと方のりとをいづのうる
似ふくと他の虫とりて茶ふる蛸もるといふ物うり遠ぐく

佛さん
三度
かづをい
豆腐
の
猿も
のう
はゝく
允まを

狸ぶりて着る仏のかうせごも
墨の衣乃明りのちれ勧もう
ろ尽とそ名ばけ物けん

あらそふ
狗の
耳み
逆ども〳〵
ゑみ
いをば
藥とも
ゐる

濁〳〵そのひさきうつもらせよ
ろこでなき声の恵み深かるこゝろ

ゑを看て
我思
さい
忘れつ

笑ふさ
まざれ
同に
咋り
ゐる

問ふをぬて人乃智恵のあい
牝をあざみもてび世を渡る業みの〳〵こゝろ乃高

忠孝と
雀鴉の
物ごとに
告れぬ
人乃
分ふみも
恥うし

近満むつまじくせよ袖の遠き訳
ちよとよう遠きにもゆくもおよう
のようとそれるのも恭うやまうを

理も
おりと
長き
物かは
はるまも
短き人乃
をしなり

利か速いたに肖ける魚さへぬべし
利あるにかおろかしい事ゝ人ぐちうるさうそ

ゐる事も
うち
こゝろ
てや
ひとへ衣
文り
ふそで
ゆする

留主
のまい
貴さ
銭しき
をくて
ふみ
ける



勢をそろて集る行の中くみ七の男さ名をそ得よ
るてんして裏羽ふりし白ぬれ衣もそ乃名残とやうん

教へよ
何事の
道ぞ
学問や
名づかも
らまを
まる
筆ふ
四だや

をのまより筆をとりに出ぬまに
遥く寝て筆の起る何業とやせんどもあるじうとまれ
ぬものぞありける

我もよく
他もよ
くと
知るよ
身の
せ間づき
ものい
猪貧乃事

和らの浦み好びかぐらも匂とおさめ家その人よ安治の人
をまじかせふ住人を天地のほうをぬふうきみぐうを

上の事
のふるも
いとね
城を
守て
下れ
業ふ
そむく
る

頃ろをそうしの中にするふ
いくもなくよき名取ぶいこ

秋たせい
稲を秋の
日を長
夕乃
星れ
ひ
うふ

歌を方を換ふるてすくふるとたしるこせよ
世代治る業ふも揮を取ひ
ごの学来浪の海路なる哉

誰もみな
知るごとく
老ていて
死ぬる
命ふく
る
苦生れ
うち

常ぐ居ぐ動くぐ人の業ぞや掘るもしれ合ぬたゝ人ゐ
るのどかぎるを一日乃命とこそきけ

例の無理
老乃
ひがみ
たもひ
ゐび
思ふ
まゝゐ
事い
のごれ

俗ぐの世ぐゐお遠ざぐ行ぐ
礼ぐいの事ぐーゐぐ
今日のおぐひろ
のこうそ
もそのおぐ
みおろぐけれん

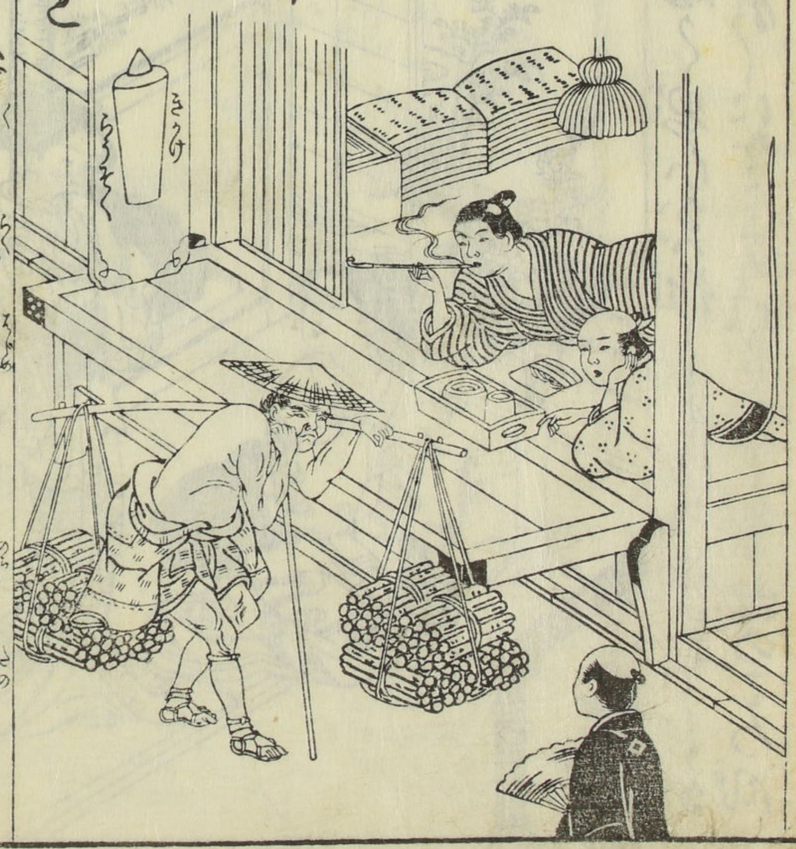
寝るるも
狩ふるそね
紙も
なるかむ
中乃
其一つ
ぞや

子ゐ仕て寅に起るそせちと
亜を待て高麦するぞ若ちき始りんわるべきとの秋

何とおく
名をを
ぬく
みく
物いそね
色こそ
よけを
山吹乃
花

なふるも始よぬく思いかが推しも浅の悔いあるぐか
何事をそべくもれしにをこうれ分ふちを神る秋のそろ風

楽み居
る月を
老の涙
若しむい
老いむし
れ
独り
しまい



楽も若の始とのみ若も年
籠次もなしと人もいふ老の涙を楽しめ
る月もまさる月を願てそれは愚かな

むしをも
今いも
おくびょう
なる源代み
生まれ

虫がしも老世のんでも老のぐろ
むし雅里の契れ老云とい流しけん天乃川かな

謀うらび親
のつねも
よろづ
遠きを
見乃
香とも
めでまり

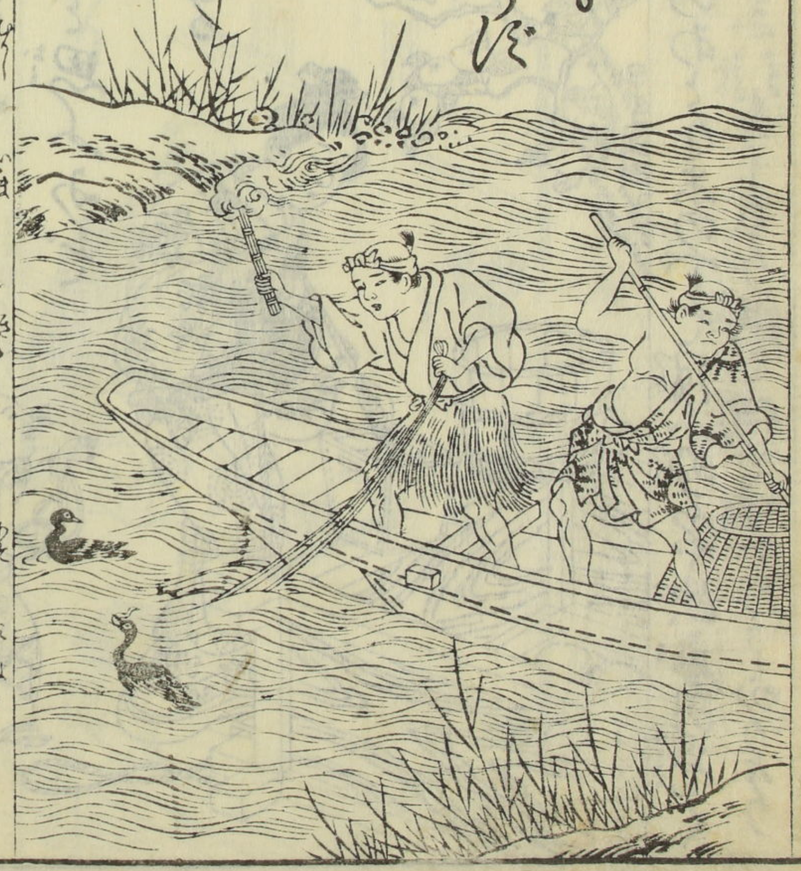
うき世とやおごふもつそ浮人の肥まで食暖うそ
植てうゑんとぬめる苔ぞゆ
ゑ野邊の萩もそ恵てよ

井の蛙を乃が
住家と思ふみぞ
外ぬ
りとも
おろ
かぢ
か

君かゞに着のあとをおのべとそ月ふめるや次座の
居ぢせゞと考るふうまそろ縄も備と実がたうとめりそう

後の世の
家苞も
鴛鴦の
眺しても
猶ぶ
箭矢の
うげ

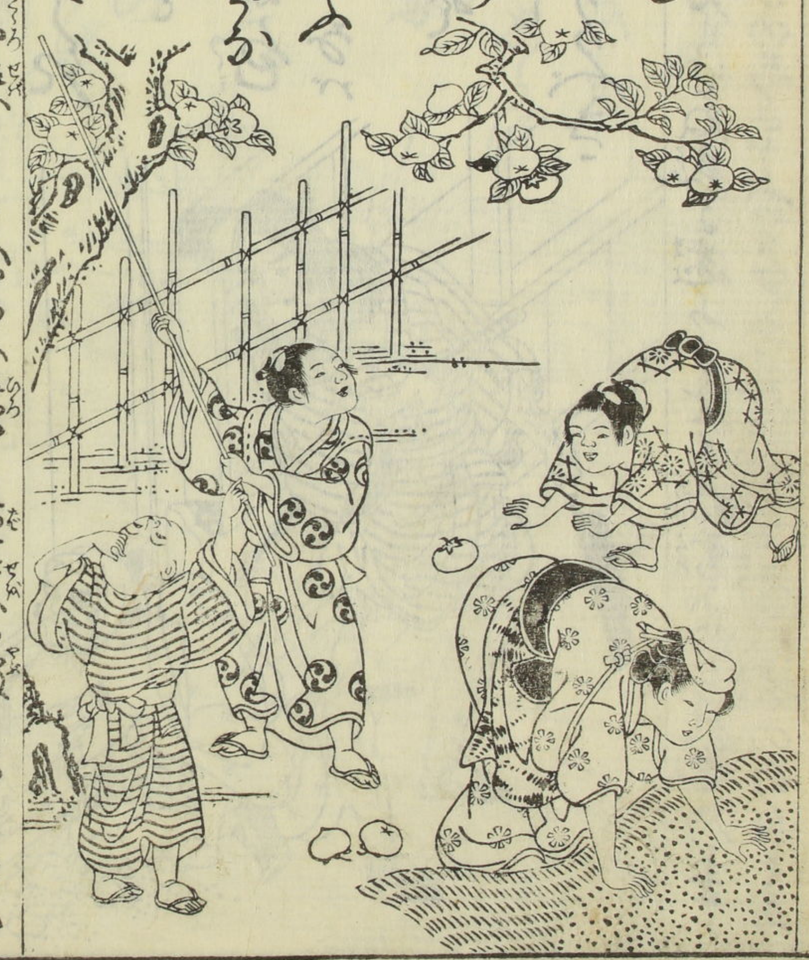
世ふるに彼も〳〵昔を今なや記よりとく捨ぞうことのちの世もわりと着る袖もなみだぞくく



おそろ〳〵
男いを
胸ふ包
なび
心の内ぞ
若しくべき

若の分つんもせぬ迄も迷てふ
老乃身にそのちぐんつんでぞよ今日の学ひ実のあけそめ

草も木も
花咲
みのり
薬も
なりて
めぐみ
人を
助べき



若みやこをん狩こゝや
車のこゝろをふきぐひ
迫もとも思ひ糸みのべらしなりせば

ふとりひ
油ふ
きとく
父母の
深き恵い
汲とり
きね

家ゐりの兩風ふせぐのこゝろみて茅葺こゝずの哥ふれそ
八きひこく今日九日の菊のさゝづき

まことなる
人と
あうが
のごとく
ふるまひて
ことに
遠ざ
うるべ
き

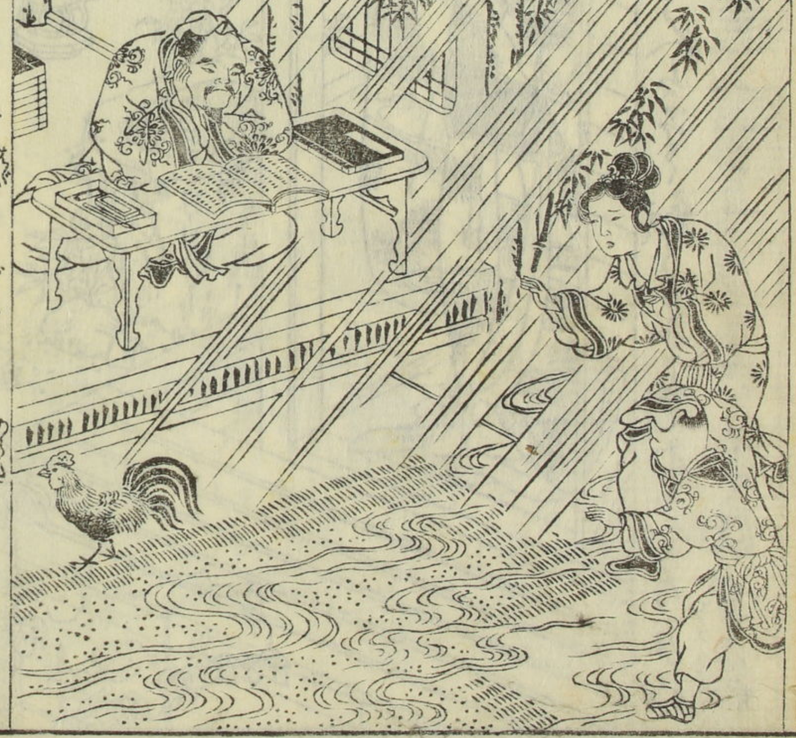
拙して昼の所作をも思ふべし
学びおん覚も多くのごとくにて
油もたまり焼乃下

今朝の
あさ
がほの
花
咲ふ
りう

怒うろ
さね
ばとも
ろん

けんくと野鶏の鳴ごとくあるべうろふこをの
毛を吹く疵求めと思ふのみぞすりこ木とりて洗ふ童第

書学ど
名代
仕人
ろう
夕立よ
流ら
麦
も
ちゃん
庵人



ふれそこんお思いまるかう
おさ等のみ〜一関ざるもぐじれおるさそでけさ夜すぐら

ろにまよ
雪代も
ちゃど
麻の夢
つま恋ふと
ろう
おりひる
う郎

ねごに海のうを恋をびい連つぐ人うゆくるよう郎ん
おーうさの息悔いゆくすおのう合法れうとおーもびさうる

えみ
わらく
人の害
もも
ゆめ
魚
肉を
おさむる
道か
忘れ
そ

多かれし
ものも
ゆに
捨ぶみ
川の
氷る
ふもとそ
めこの
程そ

秋の夜を
ものごう
ぬさび
ほぐつを
さし
機織
むしの
名ふも
恥かん

秋かく秋の度毎に
衣をかり姫のゆくりけん
はんもろくゆふ雲のそら

さのこやい
夜乃ふを
まも
ぬさも
しげ
か
野か伏
人形
見るぬ
つぬ
ても

酒をそそぐ紅葉をこそ
さかけさい秋ふゆづりて
老ぬ夜の勝い月うんかほー

聞きもどみ
あの
乃れ
たうとたい
法花
唱る
名を
のうは

君が代を演の志の松ふそうそて世のまつ松の葉数もうか
乳の遠てつ人を祭よそんみさ利き初みーつもちつずよ

後合
て
とるべき
物も
そこぬ人
面ぼこ
をも
ねんと
すらん

雷ゆうて時ーもいつぬ行
美ついて思ふるゆうとうも
ゆめなり

物かしてきく
嬶
人のこと葉
花みやげ
かりける

面目もなくて人ごとにいひまぎらかし
同心みやげを渡すべき事なれども
なをどうたくさうそうべきれ

かるいかるい
すきても
世を渡る
けうりの
人を
あなどる

みちのくに而ぶなきこの事も乱をふるゝ
このむしろのさゝ方なるべきや
てうの業にや

死する
もも
名残けが
さぞと
思ふ
を
人の
人さる
みち
ぞと
おもへ
ども

安害の道と
ハ云ひ
備へ無ク候ハゝと云ふ
ものゝ
ふもんの
きわ
ぞと
おもへ
ども

笑顔の中
ゟ
なみだを
こぼす
ハ
世ゝ
あるべ
絵ゟ
ものゝ
ふ
者ゝ
人ぞ
おもふ

人の
分れ
羅も
うつゝ
月影の境う
仰くも
たゝと
うつけを

悲とも哀とも汲もべきをのざうていいよ〳〵人ゝ偽らまやせん
人ゝてあるにまうどとのそれなど世み侘うしいわ〳〵とぞ思ふ

物うきを
なかとも
うやよのさう
世中ゝ

我身
忘れ
人と
いそれ
そ

藻みすある雲の中にも奥いある人と生れ
備とうみのごといそまぬ道あるてぬけゝりそ哀れなる

若季作
ばかりよ
おかしく
年も越
万栄楽
春
玄旧
もろよ

牡蠣もわさびもそこそこに
関すへて客で短気のいもり酒
めしほうぐちのぼるんじゃめよ

すゑ斜の
作とゐる
右源も
学紙勉
める
志ろべ
もの

直ぬるもうしろいかりも
媒酌ふ世の仇もそ目出さけまくの代も古家ようごれてるか

一ぬまづ
こゝを
まつじまさ
老のみち
茅の
苔
なと
てを
ゆ

二そいうて
浮代の
掟ふ
かく
ほど
是を
一まる
うそ
をる

三徳を
たゞこゝへ
おりふし
つゝまを
守(もり)
きうと
四(よ)り
け秋

四徳(とく)とい
仁義(じんぎ)
礼智(れいち)
と
ゑねて
四(よ)かん
年
みくも
讀(よみ)て
知(しる)べし

五倫とは
なにぞと
問しに人乃
答て
笑つゝ
やんや

六ハ
直
きこゝろの
猛
きをも
よく
治
なびけて
守
まもるべき
事

七賢も
その世と
知らく
外と
のがれ
ほふ
のこと
為をぞ
仰ふか

八の字を
称乃
道ふも

たうとゝぬ
濁ぬ
ほさ
うゝ
示めす

九とつゝ
濁るふ
間を
なるをけり

をゝまち
ところ
あるだし

十の字ゝ
紙衣ゝ
名ふも
ありと笑ふ
ゝまも
破ゝと
ゝふ
かべ

百の物

積くる名ふあと

渡舎や

河魚九里よ

ともなふ人

子早振

神の

恵も

汲て

しる

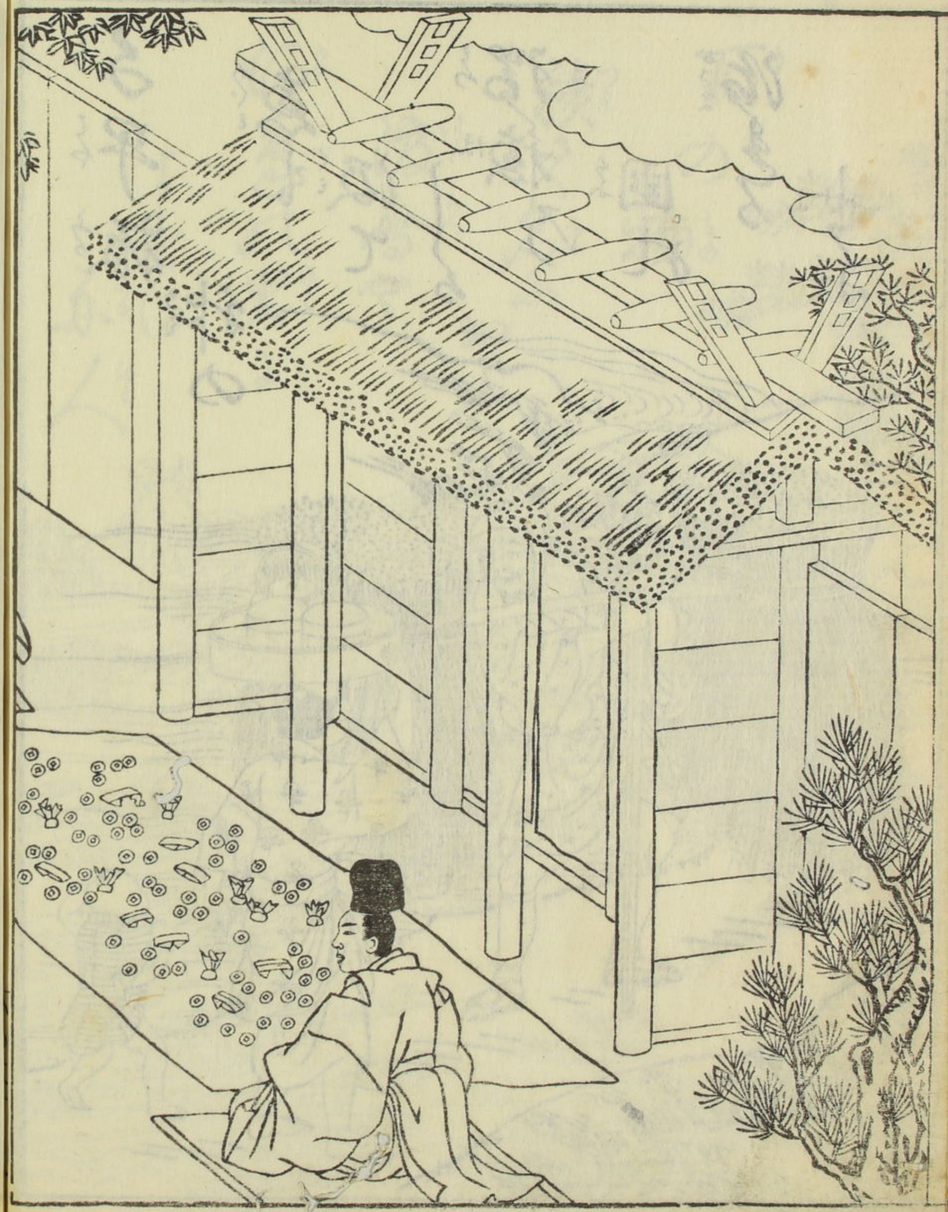
瑞穂乃

国ゝ

治まる

世ふ

萬國を照す
月日の
光をも
門外九郎乃
恵こそ



いろは
ゆづる
難波津
の
歌

なにはづの
うたは
むかしの
ひめまつも
よろこぶ
ことの
はなりけり

いろは歌の始まりは仁徳天皇の御代に王仁という博士が百濟より渡りて書学び道と教へおもふ事も学びて仁徳の帝に御伝ひせ給ふる事あり今もまなびと咲やこの花という云の葉とりてそ学びろうんもうて其ひと

跋

右のたぐひ歌いそとをの志る人乃
目ふもゆるべき物ゆゑ教誡とゝのへて難波のうた
しの伊勢ぬ濱萩の額のごとく
浄代よ賞をまして名ふれ乃
のごとなる言の葉とゝのへて當世益乃
道のこゝろをしるべそ我が学しこけまた
乃ちろを模寫せしめい彼ちまゝ飴と高
ふりのごとくび簡ふ引まをく児童のりそ我び

ともなかるの愚なるもおのぼうその其そ
をわまかしい善ふ勧こ恵仏徳さ安せめ人の
笑しい筆とれるともも恵老がお意ふ叶へるな
ゑーと揮ふちるとだある事とおうけこ

南勢野史書

洛西住
下河邊拾水

画圖

安永四乙未年正月吉日

京都書林　寺町通松原下ル町
菊屋喜兵衛版